

一般国道442号八女筑後バイパス 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

福岡県八女市納楚所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第98集

2013

八女市教育委員会

一般国道442号八女筑後バイパス
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

福岡県八女市納楚所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第98集

2013

八女市教育委員会

序

八女市の西部に位置する納楚地区には弥生時代を中心とした遺跡が数多く存在していると考えられ、水田や畑地を観察すると土器や石器などの破片が地表に姿を現しており、地下に包蔵されている遺跡の多さを物語っています。

これまで遺跡が数多く埋蔵されている事は予測されていたものの、実際の発掘調査が本格的に実施されるのは昭和後半の時代に入って以後の事になります。昭和後半から平成の初め頃に赤氏遺跡や万上田遺跡の調査が行われた事を皮切りに、平成3・8年度の熊野遺跡等の開発に係る事前の発掘調査が行われ、特に平成3年度の熊野遺跡の調査においては環濠や大規模な墳墓群が見つかり、当地にはまだまだ我々の知らない多種多様な歴史が眠っている事がわかりました。

今回の報告は平成24年度に行われた発掘調査の内容を広く公開する事で地下に埋没している遺跡に対する深いご理解を頂く事を目的としております。

本報告書が当該遺跡のみならず、市内に点在する文化遺産を深く理解する一助となり、より文化財愛護の心を育むことに寄与出来るのであれば幸甚の極みであります。

最後に、当該遺跡の発掘調査に格段のご理解を頂きました福岡県八女県土整備事務所の関係者各位、及び、地元地域の皆様方には並々ならぬ協力と応援を頂きました。

深く御礼を申し上げますとともに、今後の文化財行政につきまして、これまで以上の暖かいご声援を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年3月31日

八女市教育委員会

教育長 西島 民生

例 言

- 1 本書は、八女市納楚所在のバイパス建設事業地内において実施した埋蔵文化財発掘調査を記録した調査報告書である。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が実施した。発掘調査及び整理事業は平成24年度に行った。
- 3 発掘調査で検出した各遺構の名称・番号は、その種類毎に記号を付し、建物関係をSHとし、溝状遺構をSD、土壌をSK、ピットをSPと表記した。
- 4 本書に使用した現地測量図については調査担当者を中心として参加者で分担して行った。なお、測量にかかる基準については任意の基準を設定し測量を行った後、国土地理院設定の日本測地系を当てはめている。
各測量図の浄書及び出土遺物の実測図作成・浄書については岩戸山歴史資料館において行った。
- 5 本書に使用した現地写真については永田が行い、出土遺物については岩戸山歴史資料館において大塚が撮影した。
- 6 本書使用の方位については、すべて磁北である。
- 7 本書の執筆・編集は大塚が行った。
- 8 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は八女市の岩戸山歴史資料館において保管・収蔵している。

本文目次

第1章 調査の経過.....	1
A 調査に至る経過	
B 調査体制	
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	2
第3章 調査の内容.....	6
発掘調査の概要	
A 平成24年度の調査	
1) 遺構と出土遺物	
第4章 まとめ.....	12

挿 図 目 次

- 第 1 図 事業地周辺の遺跡分布図 [1/25,000]
第 2 図 船底遺跡 4 次調査位置図 [1/2,500]
第 3 図 船底遺跡 4 次調査 遺構配置図 [1/100]
第 4 図 SH-01 実測図 [1/80]
第 5 図 SH-02 実測図 [1/80]
第 6 図 SK-01 実測図 [1/40]
第 7 図 SH-01~03 出土土器 実測図 [1/4]
第 8 図 SK-01・02、及び、SX-02 出土土器 実測図 [1/4]
第 9 図 SH-01・02、及び、SX-02 出土遺物 実測図 [1/3]

表 目 次

- 第 1 表 出土遺物観察表

図 版 目 次

- PL 1~PL 2 船底遺跡 4 次調査 遺構写真
PL 3~PL 5 船底遺跡 4 次調査 遺物写真

第1章 調査の経過

A 調査に至る経過

八女市の西部に位置している納楚地区周辺は、本格的な発掘調査に着手される以前より表面採取される弥生時代の遺物の多さから、八女市内においては稀な埋蔵文化財密集地である事が予測されていた。

今回の発掘調査は一般国道442号八女筑後バイパス建設事業に伴うものであるが、八女市教育委員会文化課と福岡県八女県土整備事務所との折衝を重ねた結果、掘削が地下の埋蔵物に及ぶ部分についてのみ発掘調査を行い、これ以外については現状保存の策が採られた。

B 調査体制

【平成24年度】

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	西島 民生
教育部長	井上 俊博
文化課長	井上 富雄
同 参事補佐	北島 一雄
同 係長	大塚 恵治（整理担当）
同 係員	永田 寧（発掘調査担当）
同 係員	渡部 真弓

なお、発掘調査にあたり、福岡八女県土整備事務所の関係各位、船底遺跡4次調査地点近隣に居住される住民の皆様、そして納楚地区の方々には多大なるご配慮とご理解を戴きました。紙面ではありますが、記して感謝申し上げます。

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

八女市は平成22年2月1日に旧八女郡に所在していた立花町、黒木町、星野村、矢部村の2町2村と合併し、福岡県下で2番目に広い行政区域をもった新たな「八女市」としてスタートする事となった。

現在、西を筑後市、東を大分県日田市、南を熊本県山鹿市と接する広大な県境の自治体となり、多様な生産活動が見られる希有な行政体となっている。東の山間部では杉や檜を中心とした林業が盛んであり、その地形を巧みに利用した文化的景観としての棚田も多数見られる。また、中山間部においては地域の気象条件の恩恵を受け、高級茶葉である玉露や良質な巨峰などの生産が盛んに行われている。平野部では福岡県産の苺の主力である「あまおう」や梨、電照菊などを生産している。

これらの生産活動を可能にしている立地は、耳繩山地と福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字状に囲まれ、大分県との境にそびえる釈迦岳山地に源を発し有明海に向け西流する一級河川である矢部川が形成したものである。流域面積647km²を誇る福岡県下第3の大河であり、古来より水上運搬に供され現市域で行われた産業すべての要であった。

しかしながら、時代の流れとともに八女市内で生産される文物の大半は陸上輸送に徐々にシフトし、今では水上輸送手段はほぼ皆無となっている。

現在の交通事情を概観すると、八女市内には大分県まで延びる国道442号線が東西に走り、交通量の増大に比例しバイパス道路の建設・開通も急ピッチで進んでいる。また、西部地区には九州の大動脈である国道3号線や九州縦貫自動車道が南北を貫いており、八女西部地区はまさに九州のクロスロード的な性格を持っている。

【歴史的環境】

船底遺跡4次調査地点は福岡県八女市納楚に所在している。

当該地周辺は以前より弥生時代を中心とした埋蔵文化財が数多く存在している地区として知られていた。平成3年度及び8年度に行われた熊野遺跡(1・2次)の調査により、これまであまり知られていなかった弥生時代後期における拠点集落の存在と墳墓群形成の動向についても、その在り方が少しずつ解明できるようになってきた。

以下、主に八女市西部地区における概要を記し、当遺跡を理解する一助としたい。

(概要)

八女市西部地区における遺跡の初現期は縄文時代前期まで遡る事が出来、国武遺跡群や平田遺跡群等では押型文土器が数多く出土している。同後期に入ると、アモメ遺跡において小規模な円形の竪穴式住居や、少数ながら墳墓が見られるようになり、移動狩猟採集生活から定住化の兆しが見られるようになる。

弥生時代に入ると、立野・大坪遺跡や亀ノ甲遺跡、宿町遺跡等の前期後半の環濠遺跡が出現する。立野・大坪遺跡や宿町遺跡は直径100m前後の貯蔵穴専用環濠と思われるのに対し、亀ノ甲遺跡の環濠は推定直径200mを超える大規模なものであり、全容は捉えられていないが環濠集落的な要素を持つ遺跡である。市内では未だ当該期にかかる本格的な稲作関連遺跡は発見されていないが、稲作と環濠遺跡はセット関係になる事が多く、これら遺跡の出現期には既に稲作が導入、または、定着していたものと考えられる。中期に入ると、これまで見られた様相とは異なった状況が展開する。中期前半から中頃にかけては竪穴式住居が散発的にしか存在しないようになり、環濠のように大規模な土木工事を伴う遺構は全く確認出来な



1. 船底遺跡3次・4次 2. 八反畑遺跡 3. 柳遺跡4次 4. 船底遺跡2次 5. 柳遺跡 6. 柳遺跡2次
 7. 柳遺跡3次 8. 楠町遺跡 9. 10. 楠町遺跡2次 11. 楠町遺跡3次 12. 船底遺跡 13. 牟田田遺跡
 14. 今屋敷遺跡 15. 茶ノ木田遺跡 (1~15: 一般国道4号八女筑後バイパス関係)
 16. 岩戸山古墳 17. 乗場古墳 18. 善蔵塚古墳 19. 丸山塚古墳 20. 茶臼塚古墳 21. 鶴見山古墳
 22~25. 釘崎古墳 26. 丸山古墳 27. 長峰地区条里 28. 吉田地区条里 29. 福島中学校校庭遺跡
 30. 平田・六反田遺跡 31. 平田・北ノ前遺跡 32. 万上田遺跡 33. 赤氏遺跡 34. 熊野遺跡
 35. 高島遺跡 36. 後ノ江遺跡 37. 津ノ江遺跡 38. 祈禱院遺跡、白石遺跡 39. 高野町遺跡
 40. 鈍土羅石館、本町遺跡 41. 南中学校校庭遺跡 42. 鍛冶屋遺跡

第1図 事業地周辺の遺跡分布図 [1/25,000]

いようになる。ところが中期後半頃になると、六反田遺跡のように大規模な集落域と墳墓域がセットになって出現するなど、再び大規模な土木工事を伴うべき大集落形成の萌芽が見られるようになる。また、前述した立野・大坪遺跡などから鉄器が出土するようになるなど、その普及と前後し、変化の著しい時代様相の到来が看取出来る。後期に入ると、各地で大規模な集落が形成されるようになる。室岡地区に所在する野口遺跡や道添遺跡、室岡工業団地内遺跡では鉄器や砥石が出土している。矢部川に面した南部地区では現在のところ大規模集落は発見されていないが、アモメ遺跡では非常に密集度の高い貯蔵穴群が発見されており、近くには墳墓群も存在することから、近接した区域に大規模な集落が存在するものと思われる。また、同地区内に所在する茶ノ木ノ本遺跡の甕棺墓群からは方格規矩鏡、深桶式銅剣、鉄戈が出土しており、これらの事象は在地有力者の台頭と共に、大規模集落同士の統合が進んでいる事を連想させる。

これと時をほぼ同じくして室岡台地上に所在する亀ノ甲・山ノ上周辺においても土地利用が再開し、地形を人為的に開削し前代とは比較にならない程の大環濠集落を形成する。西山ノ上遺跡や国道442号線パイパス建設関係の遺跡群がこれに該当し、特に前者においては原始鍛冶の痕跡とともに多量の鉄片、大陸由来の鑄造鉄斧片などの当時最先端の鉄素材が多量に出土するなど、一気に弥生時代における全盛期を迎える。しかしながら、西山ノ上遺跡が見せるように後期後半～末頃にかけて鉄素材を投棄したり、居住域を大幅に縮小する傾向が見られる。原因は定かでないが、瀬戸内地区で多く見られる高地性集落の発生時期と重なるところもあり、注意すべき点と思われる。

古墳時代に入ると、地域的な隔たりはあるものの、北部丘陵上（以下、八女丘陵）では4世紀前半頃から5世紀前半にかけて方形周溝墓や小円墳が造られるようになる。辻の西遺跡（1・2次調査）や立山山古墳群がこれに挙げられ、比較的小さな墓域の中で造墓活動を行っている事がわかる。5世紀前半になると八女丘陵上に大規模な古墳が次々に築造される。所謂、筑紫君一族が築いた八女古墳群であり、その初現は広川町所在の石人山古墳（108m）である。内部主体たる初期横穴式石室には直弧文を浮き彫りした家型石棺が納められており、最古級の装飾古墳としても知られる。5世紀後半代になると八女古墳群から大型前方後円墳は姿を消す。しかし、これを補完するように瑞王寺古墳（直径26m 円墳）、欠塚古墳（墳丘長45m 前方後円墳）、本6号墳（直径41m 円墳）、釘崎2号古墳（墳丘長約47m 前方後円墳）、丸山古墳（墳丘長55m 前方後円墳）等の古墳が次々に築造される。しかし、50m前後の中規模から逸脱しない点に、首長墓系列の一時的な不在を読み取る事が出来る。6世紀前半～中頃になると、筑紫君全盛期を築いた磐井が築造した岩戸山古墳（墳丘長135m 前方後円墳）が出現する。日本書紀等にある磐井の乱後は、それまで単一的に連なっていた首長墓系譜が岩戸山以後は乗場古墳（墳丘長約70m 前方後円墳）、善蔵塚古墳（墳丘長約90m 前方後円墳）、鶴見山古墳（墳丘長87.5m 前方後円墳）など、複数の大型前方後円墳が出現し、首長系列の複数化を暗示している。6世紀後半代になると直径10m前後の小円墳が爆発的に増加すると共に、後半～末頃には前方後円墳は完全に姿を消し、童男山古墳（直径48m 円墳）などの大型円墳が出現する。しかし、7世紀初頭以後、これらの古墳に後続する大型古墳は全く見当たらず、歩調を合わせるかのように後期群集墳も姿を急速に消してゆく。

これらの現象を最後として、八女古墳群は終焉を迎える事となる。

第3章 調査の内容

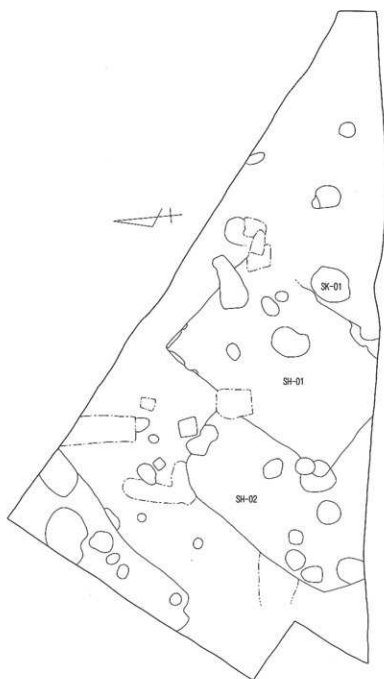
発掘調査の概要

一般国道442号線八女筑後バイパスに係る発掘調査は、平成13年度に実施した西山ノ上遺跡や四丁堀遺跡を皮切りに今年度まで継続し、多大な考古学的新知見を提供してくれた。その間、平成22年度10月に筑後市大字久富（県道筑後城島線）から同市高江（県道瀬高久留米線）までの延長1.1km区間が開通し、八女市大島（国道3号線 大島三叉路交差点）から大川市大橋（国道442号線 入道橋東交差点）までの約16km間の連続通行が可能となった。

平成24年度の発掘調査は本事業における最終年度にあたり、弥生時代中期後半～後期を中心とした遺構を検出。数多くの遺物が出土した。

発掘調査の全行程終了後、平成24年度中に出土遺物等の整理作業を終了させ本報告に至る事となった。以下においては、各調査の結果について報告を行う。

〔平成24年度の調査〕



第3図 船底遺跡4次調査 遺構配置図〔1/100〕

A 平成24年度調査

平成24年度はこれまでの未調査部分を対象として調査を行った。当該事業地が三角地であり、道路部分のみの調査であるため調査面積は非常に限られているが、約320㎡分の調査を行う事が出来た。

以下、調査に係る部分について言及し、全体像については後述する。

1) 遺構と出土遺物

重機によりやや厚めの表土を除去したところ、後世に攪乱された痕跡及び盛り土も多少見られたものの、古代の遺構が比較的良好な状態で遺存している事が判明した。

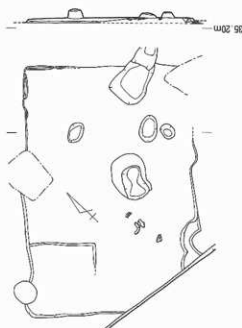
検出した遺構は竪穴式住居(SH)2軒、土壇(SK)1基の他、ピット多数等を確認した。

また、本文には記述していないが、調査区西端部には西側に向かって落ち込み状の地形が存在し、埋土中からは比較的多くの出土遺物があつた。しかしながら、斜面の形状に多くの凹凸が存在する事、調査区内に現れている辺部のラインが一定していない事、出土する土器に多くの時期差がある事、等から調査者は自然地形中に埋土と共に周辺に散在する土器群が混入した結果と判断した。

SH-01 <第4図>

調査区中央部において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴式住居である。遺構本体の一部をピット等により切られているが、本調査区内における主要遺構中最も新しいものである。長軸方位をN-46°-Eに取り、規模は長軸長5.2m、短軸長3.7m、深さ0.13mを測る。検出部分の南西端にある方形の高まりはベッド状遺構と思われる。他の隅部には痕跡が見られないことから、ベッド状遺構は南西隅部分にのみ付設されていたものと思われる。中央付近には中央炉(地炉)があり、その周辺部から比較的多くの出土遺物が出土した。主柱穴については北辺部付近に2本確認出来たが、南側については検出されていない。しかしながら、本来は4本柱の建物であったと思われる。

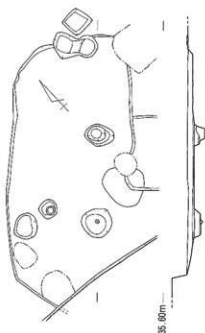
弥生時代中期末頃～後期前半頃のものと考えられる。



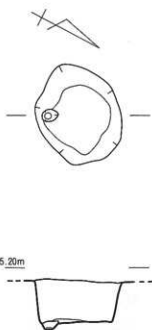
第4図 SH-01実測図 [S=1/80]

SH-02 <第5図>

調査区中央西側において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する竪穴式住居である。遺構本体の一部をSH-01が切っている。長軸方位をN-44°-Eに取り、規模は推定長軸長5.7m以上、推定短軸長4.9m、深さ0.15mを測る。住居中央には地炉が設けられていたようであるが、未掘のため詳細は判然としない。主柱穴に該当するピットとしてP1・P2が想定される。しかしながら、幅5mもある建物を2本柱で支える事は困難と思われることから、SH-01に切られている部分に2本分の主柱穴があつ



第5図 SH-02 実測図
[S = 1/80]



第6図 SK-01 実測図
[S = 1/40]

たものと思われ、本来は4本柱の建物であったと思われる。

調査担当者はSH-01調査中、本住居東側に相当する部分に3番目の住居としてSH-03の存在を想定されていたが、出土遺物の知見等からSH-03出土遺物ではなく、本住居の出土遺物が混入していたものと思われる。

本住居は弥生時代中期後半を中心とする時期が想定される。

SK-01〈第6図〉

調査区中央東側で検出したやや不整形な長円形の土壌である。規模は1.1m×0.87m、深さ0.46mを測る。土壌底面南端に小規模ではあるが直径15cm程の小穴がある。昇降用の柱材の痕跡とも考えられるが、判然としない。ただ、SH-01との位置関係から建物内部に取り込まれていた可能性もあり、その場合は貯蔵用の住居内土壌とも考えられる。

第4章 まとめ

一般国道442号八女筑後バイパスに係る発掘調査は、平成13年度に実施した西山ノ上遺跡や四丁堀遺跡を皮切りに今年度まで継続し、多大な考古学的新知見を提供してくれた。特に平成13年度調査の西山ノ上2次調査(R442BP分)や平成15年度調査の西山ノ上3次調査(R442BP分)、室岡・山ノ上遺跡3次調査、亀ノ甲・山ノ上遺跡、平成16年度調査の亀ノ甲・山ノ上遺跡2次調査などにおいては膨大な数の土器・石器群の出土や鉄製品の出土に加え、4重にも巡る多重溝(環濠か)が検出され、室岡遺跡群の中核的遺構群である事が確認出来た。

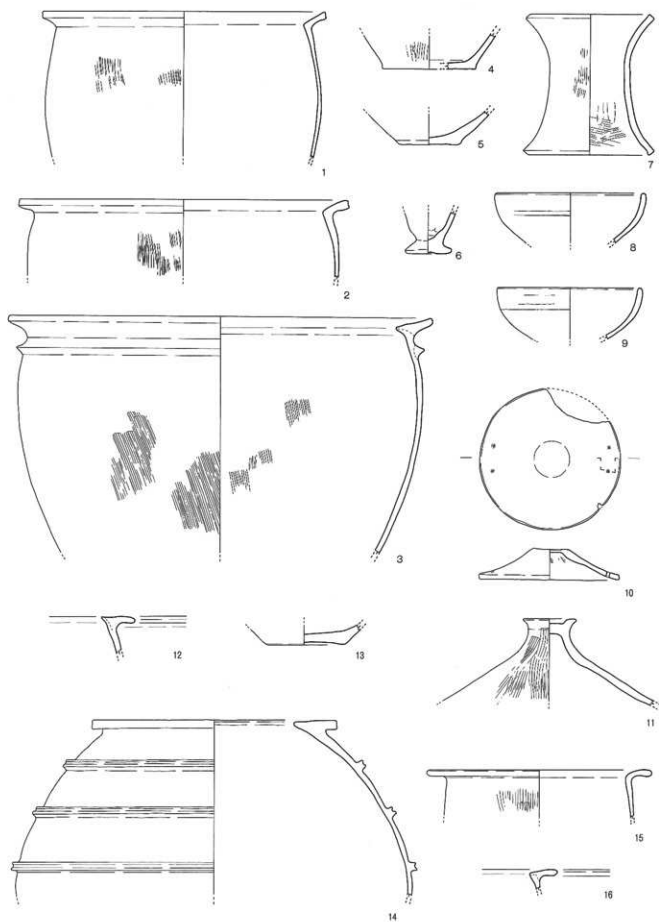
これら遺構群の中心的な時期は弥生時代後期中頃～後半頃で、次に迎える古墳時代に向け世の中が大きく変動しようとしていた時期に当たる。この時期は佐賀県・吉野ヶ里遺跡に代表されるような大規模な環濠を有する拠点集落、いわゆる「国邑」が各地に出現する時でもあり、室岡遺跡群における遺跡の在り方は、まさに八女地方における拠点集落を具現化したものと解釈して差し支えないものと考えられる。

ほぼ同じ時代、室岡遺跡群から東に3.8km離れた船底遺跡4次調査地点においても集落が営み始める。今回の調査で検出された竪穴式住居は室岡遺跡群のそれより1時期古いものであり、出土した土器から弥生時代中期後半から後期前半頃のものと考えられる。本調査区では面積が限られていたため集落全体を見渡す事が出来ないが、周辺には熊野遺跡1・2次調査や赤氏遺跡が所在しており、弥生時代後期の集落及び大墳墓群が形成されていた。船底遺跡4次調査で見つかった住居跡は、その地理的要因から熊野遺跡や赤氏遺跡を中心とした大遺跡群の一端を示すものと考えられ、本調査の最大の意義は八女市納楚地区に展開している弥生時代後期の遺跡群における胎動時期が推定出来るようになった事と考えている。

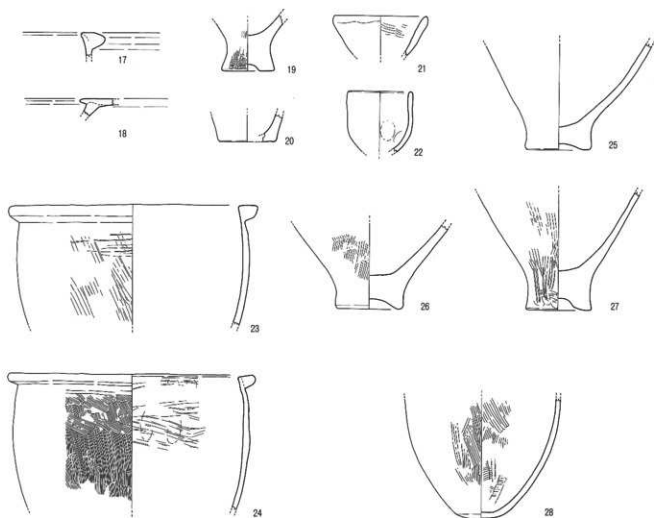
今後においても、当地区の遺跡動向を注意深くみつめ、弥生時代における八女地方の在り方を探って行き、市民・県民の皆様に広く通か2000年前の弥生時代の八女市について想いを馳せて頂きたいと考えています。

なぜならば、弥生時代は日本の原風景を形作った時代でもあり、弥生時代について知る事は現代の社会について考える事に繋がっているからです。

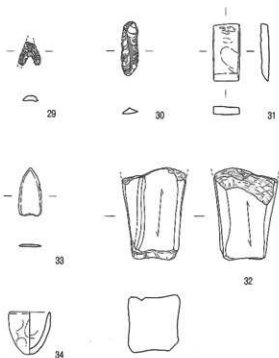
本調査が無事に終了した事は、事業関係者の皆様、並びに地域居住の皆様の支えがあったからこそです。紙面上ではありますが、深く御礼申し上げます。



第7図 SH-01~03 出土土器 実測図 [1/4]



第8図 SK-01・02、及び、SX-02 出土土器 実測図 (1/4)



第9図 SH-01・02、及び、SX-02
出土遺物 実測図 (1/3)

出土遺物觀察表

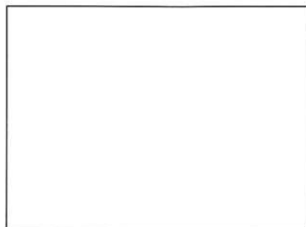
第1表 出土遺物観察表

標目	土器番号	実測番号	出土遺構	機種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調、胎土、焼成	備考
第7図	1	1	SH-O 1	甕	30			淡黄褐色。片岩・石英・赤色微粒子含む、良好	
	2	7	"	甕	34.7			淡黄褐色。片岩・角閃石・赤色微粒子含む、良好	
	3	10	"	甕	45			淡茶色。片岩・角閃石・赤色微粒子含む、良好	
	4	6	"	甕		10		淡茶色。片岩微粒子含む、やや良好	
	5	8	"	甕		6.3		白淡黄褐色。片岩・赤色微粒子含む、やや良好	
	6	4	"	脚付甕		4.9		茶褐色。片岩粒子含む、やや良好	
	7	3	"	懸台	13.5	14	14.8	淡黄褐色。片岩・赤色微粒子含む、やや良好	
	8	9	"	鉢?	16			淡褐色。片岩・赤色微粒子含む、やや良好	
	9	72	"	鉢	15.3			淡黄褐色。片岩・赤色微粒子含む、やや不良	
	10	28	"	甕	14.7	3.7	3.2	丹塗り。片岩・赤色微粒子含む、良好	
	11	25	"	甕	5.7			淡黄褐色。片岩・赤色微粒子含む、良好	
	12	11	SH-O 2	甕				黄褐色。片岩微粒子含む、胎土精緻、良好	
	13	64	"			8.6		淡茶色。片岩・角閃石微粒子含む、やや不良	
第8図	14	2	SH-O 3	甕	26			淡茶色。片岩・赤色微粒子含む、やや良好	
	15	55	"	甕	23.1			淡黄褐色。片岩・角閃石・赤色微粒子含む、良好	
	16	63	"	甕				淡黄褐色。片岩粒子含む、やや不良	
	17	15	SK-O 1	甕				淡茶色。片岩・角閃石・赤色微粒子含む、良好	
	18	17	"	鉢?				褐色。片岩・赤色微粒子含む、良好	
	19	16	"	甕		5.6		茶色。片岩・角閃石・赤色微粒子含む、良好	
	20	58	"	甕		6.1		淡黄褐色。片岩・赤色微粒子含む、やや不良	
	21	61	"	甕	9.9			白暗黄褐色。片岩粒子含む、やや良好	
	22	59	"	鉢?		6.9		淡黄褐色。片岩粒子含む、やや不良	
	23	26	SK-O 2	甕?	26.2			淡茶褐色。片岩・石英・赤色微粒子含む、良好	
	24	27	"	甕	25.7			淡茶色。片岩・石英・赤色微粒子含む、良好	
	25	71	"	甕		7		黄褐色。片岩粒子含む、やや良好	
第9図	26	51	"	甕		7.2		淡黄褐色。片岩粒子含む、やや良好	
	27	30	"	甕		7		茶褐色。石英・片岩粒子含む、やや良好	
	28	68	SX-O 2	甕		5.2		茶色。片岩・角閃石・赤色微粒子含む、やや良好	
	29	18	SH-O 1	石皿	長 1.7	幅 1.5	厚 0.35	黒曜石製、重さ1.0g	
	30	24	SH-O 1		長 4.2	幅 1.3	厚 0.4	黒曜石製、重さ2.3g	
	31	21	SH-O 2	片刃石斧	長 4.5	幅 2.1	厚 0.65	泥岩製、重さ14.8g	
	32	20	"	砥石	長 7.2	幅 5.0	厚 4.3	砂岩製、重さ250g	
	33	23	SX-O 2	磨製石皿	長 3.7	幅 1.8	厚 0.15	片岩製、重さ2.2g	
	34	66	"	ミニチュア	3.3			淡黄褐色。片岩粒子含む、良好	模形

PLATES

凡例

出土遺物に関する PL の記載は、以下の要領となっている。



遺構名

掲載番号



船底遺跡 4次調査 遺構検出状況 (南東より)



遺構検出状況 (東より)



遺構検出状況 (南東より)



SK-01 半截状況 (北東より)



SX-01 半截状況 (南より)



SH-01 中央炉検出状況 (南西より)



SH-02内ビット 半截状況 (北西より)



SH-01・02 掘削状況（南東より）



SH-01 炉跡断面状況（南より）



調査区北西隅 検出状況（南東より）



SH-01 断切状況（北東より）



SH-01・02 断切状況（北東より）



発掘作業風景



大雨による現場の水没（西より）



SH-01・02 掘削状況（北東より）





SH-03

14



SH-03

15



SK-01

19



SK-01

22



SK-01

23



SK-02

24



SK-02

25



SK-02

26



報告書抄錄

ふりがな	いつぱんこくどう442ごうやめちくごばいばす まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	一般国道442号八女筑後バイパス 埋蔵文化財調査報告書Ⅶ							
副書名								
シリーズ名	八女市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第98集							
編著者名	大塚恵治							
編集機関	八女市教育委員会							
所在地	〒834-8585 福岡県八女市本町647							
発行年月日	2013年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ふなそこいせき4じちようき 船底遺跡4次調査	やめしのうそあざふなそこ 八女市納楚字船底	402109		33° 12' 58"	130° 34' 21"	2012. 5. 18～ ～2012. 8. 31	320㎡	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
船底遺跡4次調査	集落	弥生時代後期		竪穴式住居、土壇		弥生式土器		
要約	竪穴式住居2軒、土壇1基、ピット多数、等を検出。周辺には熊野遺跡や赤土遺跡といった後期を中心とする遺跡群が存在しているが、納楚地区周辺における弥生期集落の形成は中期後半頃から始まっている事を示唆している。							

一般国道442号八女筑後バイパス
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ

八女市文化財調査報告書 第98集

平成25年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647

印刷 橋爪印刷
八女市吉田1899-1